

へえっ、そうなんだ

tutoo

リニアモーターカー

2027年にリニアモーターカーが品川から名古屋まで走り、2045年には大阪まで延びるといふ。

大阪までの所要時間が67分間だと。

リニアモーターカーで思い出した。

小学校の夏休みの宿題で長女がリニアモーターカーを工作に作ると言い出した。

いや、もしかしたら私が言い出したのか？もちろん、本物のように「超伝導」ではなく、磁石を使ったリニアモーターカーだ。

磁石が反発するのは面白い。ぼわんぼわんってやわらかく跳ね返るのはいい感じだ。

幅が狭い板磁石だったので、浮き上がりはするもののなかなか安定しなかった。

結局、私ひとりで作ったようなものだった。夏休みが終わり、学校に提出したその作品で長女は、みごと優秀賞をもらったのだ。

いまから、20年以上前の話である。

さて、私は果たして東海道リニア新幹線に乗れるのか？計算してみた。

名古屋までの開通時は80歳である。（これは何とかなるかも）

大阪まで延びる年は98歳だ。（これはかなり確率が低い）

私が死んでからのことだとわかるとなんだか寂しい気持ちになってしまった。

特にリニアモーターカーに乗りたいと強く思っていない。

思っていないにもかかわらず、悔しいような・・・

当たり前なことだけど、人間はいつか死ぬ。

私の父は生前、「百歳まで生きる、生きて孫の成長を見たい」と言っていたらしい。その父は希望がかなわず十年前に86歳で亡くなった。私の子供の結婚を見てもらえなかったのは残念である。

長生きすればいいってもんじゃないけれど、元気で長生きできたらな・・・

せめて、孫の結婚式に一度は列席してみたい。今希望はひとりだけだ。その孫は2027年で十九歳。うーん・・・

(2010年9月)

FACETIME

長女が「なんとなく…」って感じで、携帯を I P H O N E に変えた。

それに刺激されたことと、女房の実家が S O F T B A N K 携帯であり通話が時間帯によって無料になることを理由に、私の携帯も I P H O N E に変更した。

I P H O N E は (a p p l e 製品はほかも同じなんだけれど、というか欧米のものはだいたいそうだけれど) 詳しい取扱説明書がない。

マニュアル人間の私は、ネットからユーザーズガイドをダウンロードして、最初のページから見ていく間に女房は実家に電話をしたり、長女に連絡をしたりと使い始めた。

入手して3日目、私はパソコンに向かって先日の上高地のホームページを編集していた。

女房は21時までにはソフトバンク同士だと無料だからと、私の I P H O N E を使って長女と話していた。

居間でのその話し声のトーンが突然高くなった。

「〇〇ちゃん、おばあちゃんですよ」

「おふろにはいったの、きれいになったね」

「はだかんぼさん、おばあちゃんがみえますか」

などと、話している声は、先ほどの長女との会話とちがいうきうきしている。

I P H O N E の売りである「F A C E T I M E」というテレビ電話機能を使い始めたのだ。女房は自分で笑いながら話している。孫と会った時にしか聞けないテンションだ。

あまりにも楽しそうなので、つられて私も参加だ。

画面には孫が映っている。お風呂上りらしく裸だ。画質は思ったより鮮明だ。

どうして、おじいちゃんやおばあちゃんが映っているのか不思議なのか、きょとんとした表情をしている。

「〇〇ちゃん、おじいちゃんですよ、見えますか」 つい、言ってしまった。

孫が生まれたとき、あまりにもでれでれ感のある”ジージ”とは呼ばせたくないことと、呼び捨てにすることを決心したのだが、つい”ちゃん”付けになってしまった。

痛恨。

画面下には小さく私たちの映像が映っていて、これが向こうに送られているのだ。その映像を見てがっかり。俺も歳をとったなとつくづく思い知らされる。

自分の意識ではまだ二十歳そこそこの、肌に張りがあり、髪の毛も長くはつらつとした表情なのに、映像ではやっぱりくたびれた初老の男なのだ。

(閑話休題)

女房は、名残惜しそうに「切るからね、切るからね」を繰り返したあと、通話を切った。

「あーあ、切れちゃった」

それからと言うものの、「I P O D T O U C H がほしい」と言い募るようになった。

携帯は次女との通話の関係もあって、a u のままでもいいらしいが、W i F i でネットにつなげられるし、携帯よりも画面が大きいし、テレビ電話もできる。

私の I P H O N E のメモに、「買うからね」との宣言まで載せるようになった。

どこそこの電気店に行って、値段を見てみるとか言い出し、たまたまヨドバシカメラに行ったら、店内で「買っていいの」を繰り返した。

だめって言うと、どれほどへそを曲げられるかわからない。

「お芝居を少し減らしなさい」というのが関の山。

「いや、減らさない」

結局、私が I P H O N E を入手した四日後に女房は I P O D T O U C H をゲットした。

さっそく、長女とテレビ電話をしていた。

まあ、老後の楽しみだからいいか。

(2010年11月)

酷暑の恵み

家の南側の小さな庭に「矢崎のイレクター」を使って柵をつくり、四本足のひとつの足元に一本のぶどうの木を植えたのはいつのことだったのだろうか。

ぶどうを植えた当初は、手入れも丁寧に行なった。房作りや摘芯もしたし、房ができれば袋もかけたので、きれいな房になった。しかし、手を抜いてもそれなりにぶどうができることを経験してからは、あまり手入れをしなくなった。そのためか房全体がそろって食べごろになることはなくなったが、色づいたものを一粒ずつもぎ取って食べていた。年により実のでき方は変化があったがまったく空振りになることはなく、出来具合を見ては収穫をし味を楽しんでいた。

子供たちは成長し家を出たし女房は糖尿病で甘いものは避けているからほとんど一人で食べることになる。思うように体重が減らない一因だと考えている。

今年、花穂（実のもと）は例年になくたくさんできた。今年は当たり年かな、二歳になる孫が喜ぶだろうな…食べさせたいと思って、今年は手入れにも力を入れた。

八月に入ると部分的に色づき始めた。早速お味見をしようと色づいた実の一つを手を伸ばしてつまんだ。すると、

（ぬるっ）

実がつぶれて、果汁と果肉が指に付着した。みるとぶどうの皮の一部が裂けている。

見ると、まだ黄緑色の実なのにのみ皮が裂けているものが多い。色づいたものはごく一部を除いて裂けてしまっていた。

（これじゃ、まったく食べることができないな。）とがっかりした。

ネットで調べると、「こくとう病」というものらしい。

実が裂けたものがポツンポツンと地面に落ちて臭いを発している。こくとう病はかかってしまうと対処できないようなことをネットで見つけた。

八月の中旬に見ると、色づきは進んでいる。しかし、これはと思って手を伸ばすとやっぱりブニョと潰れるものがほとんどだが、中にはしっかりとしている実もある。せめて少しだけでも食べたい。手で触れて潰れるものは地面に落とし、思い切って房ごと切除していった。わずかながらもよいものを収穫し食べていた。

八月の下旬。ずっと雨がなく猛暑日が続いた。例年になく暑さで、畑の土も乾ききっている。庭のぶどうは熟している実が増えてきた。

脚立を立てて上ってみてびっくりした。なんと、あの避けた実が少なくなっており、まんまるで皮がしっかりと張った実がたくさん見つかった。黒とう病の特徴もあまり出ていないのだ。

ある房には数粒の実が食べごろになっていたの、房ごと採ることもできた。こんなことはずいぶんなかったことなのだ。

（暑さで病気が活動できなかったのに違いない。この暑さも良いことがあるんだ…）

「へえ、たくさん採れたんやね」

女房がびっくりしたように言い珍しく数粒食べた。

孫に持って行こうかと言うと、

「そんなんやめとき」

どういう意味なんだろうか。 いずれにしてもしばらく楽しめる。今年ぶどうはダメだ。と諦めていたのだが、家にいるとクーラーがないと「熱中症」になりそう「異常な」「困りもの」の暑さがブドウの恵みを与えてくれた。

(2010年8月)

夜行バスに乗って

急に、神戸に行く用事ができた。料金の事や神戸への到着時刻などを考えて、料金が安く最近快適になってきているらし高速夜行バスを利用することにした。

東京丸の内で予約していたバスに乗った。酷暑の夏は過ぎ、しかも夜の十時で半袖では暑さを感じない。バスの中に入ると冷房が入っていた。三列タイプのバスの、私の席は中央の列のほぼ真ん中。なんとトイレの横。(ひえーっ)

妻は左側の列で、私の横ではあるが微妙に前にずれている。座席の上には小さな毛布が用意されていた。

定刻に発車したバスは横浜で新たな客を乗せたあとは、車内の照明も消されて夜行モードに入った。

「エアコンは自動調整になっており変更できません。皆様の席にある毛布などで調整ください」10項目くらいあった注意事項のひとつだ。毛布を広げると、幅はシートの幅、長さは身長分くらい。(ひええっ。狭っ)

後が空席なので、気兼ねなく120度くらいリクライニングさせた。きちんと上向きに寝てIPODを聴いていたが、半袖の腕が寒くなってきた。冷房が効きすぎているのだ。早速例の毛布を広げた。

他の人を見ると、幅が狭いまま布団をかぶるように縦に長く使って微動だにしていない。真似をしてみたけれど、幅が狭いからすぐには腕が出てしまう。

次に、毛布を横にを使って、ショールのように肩からかけてみた。腕がとたんに柔らかい温かさに包まれた。これでいいのだ、とIPODに集中。聴いているのは実は落語。立川志の輔の「中村仲蔵」である。家でも、落語を聴きながら眠ることが習慣になっている。”落ち”まで聞いたことはない。十分間ほどで眠りに落ちてしまう。果たして、このバスでは…

胸が寒くなってきた。ショール方式から、前から上体を包み込む方式に変更。背中シートだから熱は逃げないから…まだ「中村仲蔵」は続いている。何しろ一時間を超える落語だ。上体はいい感じ温かい。ところが次第にひざから下が冷たくなってきた。冷気がふわっと床付近に滞留しているように感じる。(くそ、眠れない)

たまたま、上体にかけていた毛布を下半身に巻いた。今度は上体が寒い。(ええい！)

やっぱり、他の人のように首から下をカバーしないとだめだ…そこでやったのは次の通り。

毛布の頂点をシャツの襟と首に挟み込んだのだ。もちろん左右とも。さらに体とシートの間に毛布を挟んで、かつ、手で毛布を掴んだ。下半身はそれほど暴れないからこれで寒さから逃れられる。

なんだかラップされたようだ。そのままずっとIPODを聴いてたら、自分のいびきで目が覚めた。

京都までに3箇所のPAなどに停止。その都度眼がさめトイレに行った。やっぱり熟睡は無理みたい。

もう少し大き目の毛布がほしい。大き目の毛布だと盗む人がいるかもしれないし、車内でヨカラヌことをする者が出るかもしれない。だから今の小ささになったんじゃないかと推察した。

それにしても、今の日本の技術なら寝ている人用の温調など、簡単にできると思うのだが。夜行バスは、快適さにはまだ今一歩二歩だと思った。

(2010年9月)